

## 磯崎敦仁編著

## 『北朝鮮を解剖する—政治・経済から芸術・文化まで』

慶應義塾大学出版会，2024年

本書は、北朝鮮の政治、経済、科学技術、芸術・文化などの各分野について、それぞれの筆者が「どうとらえるべきかを考察した」論文集である。また編者は、本書が北朝鮮をより深く知るための「手引き」であるとの位置づけを示している。

「手引き」としての読者像は、大学の卒業論文や修士論文で、北朝鮮を扱ってみたいと考えているような人々であろう。そう思わせる構成上の工夫がある。各章には担当する分野の「全体像」を整理した部分があり、多くの章では当該分野での研究に着手する上で当たるべき原資料や先行研究が言及されている。その上で各章は、専門に基づき特定のトピックスについて論じている。加えてコラムがあり、各章執筆者が「北朝鮮研究との出会い」を記している。これなどは、研究者のミニ個人史として面白いし、北朝鮮に限らず、地域研究を志す者にとっては大いに参考になろう。

以下、各章の豊富な内容をごく簡単に紹介しつつ、主に研究の「手引き」という観点からの論評を行う。最後に各章をまたがっての興味深い点について述べ、まとめとしたい。

なお本書からの引用にあたり、評者による補足がある場合には、〔 〕の中に記してある。

### 第1章 政治——金正恩の「お子さま」をめぐる『労働新聞』の論調分析（磯崎敦仁）

この章は、まず「北朝鮮政治研究の現況」という節で、北朝鮮政治研究に利用できる資料を概説する。たとえば『労働新聞』や最高指導者の発言・著作集は、それらが示す指針に北朝鮮国民は従う義務があるため、北朝鮮の（国家としての）行動や思考を理解する上で必須の資料になると説明する。こうした資料には「プロパガンダ」や「誇張や虚偽」が含まれており、検証した上で利用すべ

きという注意喚起も忘れていない。

次いで筆者は、金正恩の「娘」が、彼の後継者なのかについての検証を試みる。具体的には、娘に対する呼称の変化や敬語の使い方などを子細に分析する。筆者の結論を評者なりにまとめると、娘が金正恩の後継者である可能性が高い、しかし金正恩の心変わりもありうるので断定はできない、というものである。北朝鮮政治の今後、特に後継者問題を考える上で、必ず読まれるべき論考といえる。

他方、本章を「手引き」として考えた場合には、「娘」という現在進行形のトピックスではなく、より明快な結論を示しうる題材を選んだ方がよかったかもしれない。また資料紹介において、最高指導者の発言・著作集にさまざまなバージョンが存在することを記しているが（そのこと自体は親切なことである）、バージョン間の違い（たとえば「事実」の追加的公開なのか）やその理由の説明があれば、さらに有益であったであろう。

### 第2章 外交・安全保障——サイバー安全保障からみた北朝鮮の「非対称戦略」（松浦正伸）

筆者は、北朝鮮の外交・安全保障を研究する上では、社会科学的な視点から理論的に分析する「鳥の目」、北朝鮮を「内在的に」考察する「虫の目」、政策の変化を捉える「魚の目」が必要だとする。特に北朝鮮は「通常の家とは異なり」朝鮮労働党が国家よりも上位の権力を有しているため、同党の対外政策の理念に対する理解が不可欠だ、という立場が示される。

第1節は、1948年の北朝鮮政府樹立以降の北朝鮮外交・安保政策の歴史を略述している。近年については、2019年2月に金正恩とドナルド・ト

ランプ間の米朝首脳会談が、北朝鮮の非核化をめぐって物別れに終わったことが、一種の分水嶺として描かれる。それ以後、北朝鮮は核増強に拍車をかけるとともに、ロシアに接近し、パートナーシップ条約を締結する。こうしたことを踏まえ、筆者は、朝鮮半島をとりまく国際関係が冷戦構造に回帰しつつあるとの見方を示す。

第2節から第3節にかけては、北朝鮮のサイバー活動が詳述される。金正恩自身、サイバーを、核・ミサイルと並べて重視しているという。その背景には、国連などによる経済制裁が、北朝鮮の貿易や人的往来を厳しく制限していることがある。

こうした分析に基づき、筆者は、国際政治学のリアリズムの観点から、北朝鮮がサイバー能力を今後とも高めていくとの見通しを示す。またサイバー領域においては、核兵器のような相互抑止が成り立ちにくいことを述べる。まさに「鳥の目」からの、示唆に富む論考であるといえる。

他方、「虫の目」という点では、疑問もある。たとえば金正恩の考えは、そのほとんどが二次文献に基づき記されている。また『労働新聞』に依拠しているとする場合にも、その見出しが「新たに建造した潜水艦進水式——金正恩総秘書参席」のように、同新聞ではあり得ない表現になっており、引用の正確性には疑問符が付く。

なお、「手引き」という点では、第1節末が、北朝鮮外交・安全保障研究のための資料や、日本語の重要な先行研究を紹介しており、初学者にとって有用な内容となっている。

### 第3章 経済・法律——社会を見つめるツールとして（三村光弘）

筆者は、北朝鮮の経済・法律に関する研究が進んでいないとし、その理由として、統計や法令・判例などが北朝鮮国外に公開されていないことを挙げる。そのため、北朝鮮経済の研究においては、数理的な推計や断片的な情報の総合といった方法をとらざるを得ないとする。

第1節では、北朝鮮経済の基礎的事項が説明される。たとえば民営企業存在を、他の社会主義国は容認しているのに対して、北朝鮮はまったく認めていない。また北朝鮮は憲法で「計画経済」

を標榜しているが、これも北朝鮮のほかにはキューバにしか見られない特徴だという。

第2節から第3節では、北朝鮮の経済政策の歴史が略述される。2003年ごろには、企業による市場の利用が広がるなど、部分的とはいえ経済改革が行われたことが描かれる。その上で米トランプ政権との間で関係改善に失敗した後は、経済制裁に長期的に耐えうる体制が目指されているとの見方を示す。

第4節以下は、北朝鮮法についての概説である。北朝鮮における法は、朝鮮労働党による統治のためのものであることが述べられる。第5節では、憲法の主な内容が簡単に示される。また民法、刑法などの法律については、何年に改正されたかが淡々と記されるにとどまっている。

「北朝鮮社会を映す鏡としての朝鮮法」と題する第6節は、法の改正前後を比較検討することにより、たとえば（公式報道では報じられない）「不適切な行為」の存在がわかると述べる。経済の節、法の節を通して、筆者は北朝鮮と他の社会主義国との比較を用いている。このような比較は、後続の研究者にも利用可能なアプローチといえる。

なお、本章は「経済」「法律」という異なる分野を扱っている。これは編者の責任になろうが、「経済」「法律」を別々の章として構成した方が、筆者としては書きやすく、読者としても読みやすいものになったのではないだろうか。

### 第4章 科学技術——保健医療へのIT活用—— COVID-19対応を中心に（上野遼）

この章は、北朝鮮による科学技術の民生利用、特に情報技術（IT）について、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）への対応を事例として分析している。第1節「概説」は、科学技術に関連する金正恩の発言や展示会の内容などを紹介し、北朝鮮が実用的な科学技術、特にITを重視していることを明らかにする。

第2節では、北朝鮮当局によるコロナへの対応が、同国発表の発熱者数などのデータも使いつつ説明されている。第3節から第7節にかけては、コロナ対策の一環として、北朝鮮が遠隔診断システムなどを整備していくさまが描かれる。

いずれの節でも、『労働新聞』などの現地資料が丹念に引用されており、今後、北朝鮮のITやコロナ政策について研究する者にとっては、必ず参照すべき論考になっている。

## 第5章 文学——なぜ北朝鮮文学を読むのか（鈴木琢磨）

筆者は、ベテランの新聞記者であり、小説や詩を通じて『労働新聞』などではわからない北朝鮮の実像、なかんずく「金正恩の素顔」に迫りたいという。その目的のため、選ばれたのが、「首領形象文学」という「金日成から世襲されてきた最高指導者がいかに偉大な人物かを知られざるエピソードをまじえ、人民に教える」ための作品群である。

首領形象文学の一つ、2016年に発行されたある小説によれば、金正日は（急死する）2011年、息子の金正恩に対して「〔米国との〕外交戦の勝負は国力と軍力だ。拳〔核〕が強ければ、大声で言葉の戦争などしなくてもすむものだ」と諭し、金正恩が「肝に銘じます」と答えたという。筆者は、こうした「事実」について、他資料との照合が必要であるとしつつも、それらを公開した意図を読み解くことが重要だとする。「拳」の小説については、父の突然の死に伴う若き息子への権力継承過程で、多少なりとも拡がっていたであろう人民の動揺を抑える目的があったと推測する。

このように、筆者は数多くの文学作品から、少なからぬ「新事実」を掘り起こし、新たな解釈を小気味よく繰り出していく。読み物としてもきわめて面白い。後に続く研究者としては、文章のテンポの良さに引込まれることなく、自分の目で原典を読み直し、事実の再確定や新解釈を追究することが求められよう。なお本章は、北朝鮮の文学作品を掲載する媒体や必読の先行研究を紹介するとともに、それらの利用上の留意点についても述べており、文学を文学として研究しようとする者にも資する内容になっている。

## 第6章 音楽——「朝鮮音楽」の創造：歴史的 形成と特徴（森類臣）

筆者は、北朝鮮音楽の政治社会的な機能について関心があると看する。その関心に沿って第1節以

降、北朝鮮音楽の時代的変遷が詳述される。

1948年の政府樹立から1960年代初めまでの北朝鮮音楽では、金日成の抗日闘争や社会主義の宣伝、朝鮮固有文化の回復などが目指されていた。金日成は、朝鮮民謡に基づいた創作を促し、澄んだ声の平安道・黄海道民謡をならうよう命じた。自分の好みを、国の音楽政策に反映させたのである。

1960年代終盤以降、金正日の指導の下、音楽はもっぱら金日成の絶対化のためのものになる。1980年代には、電子楽器を使う軽音楽団が生まれる。金日成の死後、1990年代中盤の「苦難の行軍」「先軍政治」の時期には、軍の合唱団が前面に出る。2000年に「苦難の行軍」の終了宣言がなされると、ポップスも演奏する管弦楽団が現れる。金正日の死（2011年）の後には、ロック調に編曲された楽曲を演奏し、歌う「クロスオーバー・エレクトリック・オーケストラ」が登場し、金正恩時代の始まりを印象づける。

このように北朝鮮の音楽は、最高指導者の方針や好みによって、大きく左右されてきたことが明らかにされる。注や章末には、音楽分野の研究に不可欠な現地発行資料と参考文献が多数掲載されており、「手引き」として有用である。

## 第7章 映画——芸術映画からみる北朝鮮の政治と社会（横溝未歩）

筆者は、北朝鮮映画を通して、同国の人々の生活や社会を間接的に観察することが可能だと看する。北朝鮮において映画は、宣伝扇動や人民教育の手段であるが、それが効果を発揮するためには「リアルさ」が必要になる。そのため、映画には、困難な業務をいとう幹部の姿など、否定的な側面も描かれるという。

第1節「北朝鮮映画の研究手法」では、まず映画作品や関連文献の入手方法などが説明される。ついで、描写には誇張や虚偽が含まれていることが実例をもって説明される。政治的な理由で俳優が粛清された場合、出演作品自体が「闇に葬られる」ともあるという。本節は、極めて有益な「手引き」になっているといえよう。

第2節以下は、北朝鮮映画の略史となっている。

1960年代半ば以降、金正日の指導で、金日成偶像化のための「領袖形象映画」を含むさまざまな作品が作られるが、やがてマンネリ化に陥る。

2010年代以降は、金正恩の指導により、人々に豊かな生活への希望を与えるような映画や娯楽性の高いアクション映画が製作されるようになる。この変化の背景には、北朝鮮社会に流入し、人々の心をとらえるようになった韓国ドラマ・映画の存在があるという。単に事象を追うだけでなく、その理由や背景にまで目配りの効いた論考であると評価できる。

## 第8章 言語——北朝鮮の朝鮮語教科書に現れた言語的特徴（高木丈也）

第1節は、音韻、文法、表記、語彙、言語政策などの分野ごとに代表的な先行研究を紹介する。言語のみならず、北朝鮮研究には必携ともいえる『朝鮮語大辞典』については、入手が容易ではないことから、いくつかあるバージョンのうち「アクセスのしやすいものをまず参照すればよい」と初学者を安心させるアドバイスがなされている。

第2節以降は、言語は社会の映し鏡のような存在であるとする立場から、北朝鮮で発行された非母語話者用の朝鮮語教材の分析が行われる。より具体的には、①表記、②語彙、③文法、④日常会話表現、⑤地理・文化・社会の各分野について、特に韓国語との比較から特徴が抽出される。

筆者は、北朝鮮では言語政策においても、最高指導者の考えが反映されるとする。1966年、金日成は、漢字語・外来語を「固有のわれわれのことば」に直すべきと教示した。こうしたことから、たとえば牛乳について、韓国では「우유（牛乳）」を使うが、北朝鮮では「우유（うしのちち）」と固有語で表するという。ただし評者の管見では、『労働新聞』などには「우유」もしばしばに登場する。話し言葉と書き言葉の違いなのか、などと考え始めると興味は尽きず、こうした点にも研究

のたねが埋もれているように思えてくる。

以上、本書の各章について、駆け足で見えてきた。全体を通して、興味深かったのは、北朝鮮の統治体制のとらえ方が、大きく分けて二つあったことである。

一つは、北朝鮮という国家は、朝鮮労働党によって統治されていることを強調する立場である。第2章（外交・安全保障）では、党が国家よりも上位にあることを重要視している。また第3章（経済・法律）は、「何かを決定するとき、朝鮮労働党内では自由に討論して決定を行うことになっている」と述べ、企業におかれた党組織が「労働者が〔企業の〕経営に参加するルート」になっているとするなど、党の政策形成機能や利益集約機能をそれなりに重く見ているようである。

もう一つは、最高指導者（首領）が、朝鮮労働党や国家に君臨していることを重視する立場である。たとえば第1章（政治）は、北朝鮮は「個人支配体制」の下にあり、「最高指導者個人の意向により政策が大きく変更される可能性がある」とする。第5章（文学）、第6章（音楽）、第7章（映画）なども、そうした前提に立つがゆえに、最高指導者をテーマにした作品を分析の対象にしよう。こうした二つの立場の間の議論がなされていけば、本書の紙価はさらに高まったであろう。

すでに述べてきたことの繰り返しになるが、本書各章は、各分野を研究しようとする者にとって欠かせない先行研究であり、よき手引きでもある。特定の章のテーマに関心がある場合でも、一見無関係と思える他の章にも目を通すことによって、北朝鮮という国家や社会を、より生き生きととらえることが可能になろう。多彩なトピックスを扱う論文集ならではの醍醐味といえよう。

（室岡鉄夫 静岡県立大学  
現代韓国朝鮮研究センター）